

2025年10月17日山背古道で観察した植物

作：岡田弘

シヨウジョウソウ（猩猩草） トウダイグサ科 トウダイグサ属 ＊花期＝5～10月

名前の由来＝シヨウジョウ（猩猩）とは、古代中国の空想上の獣で赤い長髪で酒が大好きな猿に似た生き物です、赤い葉が猩猩の赤い頭髪を連想させることからの命名。南アメリカ原産の1年草で明治時代日本に観賞用として渡来、栽培していたものが逸出して野生化している、半低木で茎は草質だが下部は木質化しているので厳密には1年草ではない。葉は変化に富んでいる＊**花言葉＝情熱・希望**。燃えるような赤い色と、どんな環境でも成長する力強さからの花言葉です。



マメアサガオ（豆朝顔） ヒルガオ科 サツマイモ属 ＊花期＝夏～秋

別名、ヒメアサガオとも、**名前の由来**＝アサガオに似て花姿が豆の様に小さいことから。北米原産の1年草、戦後の食糧難の時代に輸入穀物に混入してきたのではと言う説？もあり不明、蔓を他の物に巻きつけて成長、長い葉柄を互生につけ先の尖った長楕円形から心臓形で先がだんだん細くなる物が多い、全縁で葉腋から花柄を1～2個だし直径1.5cmぐらいの漏斗形の白い花を咲かせる。上から見ると五角形か星形に見える。よく似た花の形状で淡紅色のはベニバナマメアサガオと言う、花の中心が濃紅色のはホシアサガオと言うあ：**花言葉＝小さな幸せ・希望**。可憐な花と、逞しい生命力、特別なていれを必要とせず咲き続ける姿が「今ここにある幸せ」と「これからの未来への希望」と両方を感じ取る花言葉です。＊毒草です。



マルバアメリカアサガオ（丸葉亜米利加朝顔） ヒルガオ科 サツマイモ属 ＊花期＝8～10月

名前の由来＝熱帯アメリカ原産で葉に切れ込みがなく丸い葉で朝顔と同じ漏斗状の花であることからギリシャ語では蔓が他物に巻き付いて這い登るので「芋虫」と呼ばれている。この様な小さな朝顔と同じ形状の花は前記したように多くある、このマルバアメリカアサガオの特徴は。花の付け根にある「罅」です、花が咲き終わった後、この罅が外側に大きく反り返ります、茎。葉柄、葉、等全体が短い毛で覆われていて柔らかな印象がある。同種のアメリカアサガオの葉は3～5に切れ込んでいる＊**花言葉＝固い絆・思いやり・活力**。：普通に道端に多く咲いていました。



オオカナダモ（大加奈陀藻） トチカガミ科 オオカナダモ属 ＊花期＝5～10月

名前の由来＝北米原産のカナダモに似ていて大きいから、属名はローマ神話の妖精エーゲリアに由来しています、南米原産の常緑性、雌雄異株ですが**日本には雄株よりない**、増えたのは茎や葉の切れ端から発芽して増える、生物の実験材料として持ち込まれたものが増殖、1970代に琵琶湖で大繁殖して問題になった。日本では重点外来植物に指定されており、移動など禁止されている。日本での分布は本州～九州、日本の在来種クロモに似るが2回りほど大きく長い物は1mを超える、葉は3～6枚の輪生。花は3弁白色（雄花）



イヌマキ（犬槎） マキ科 マキ属 ＊花期＝5～6月（風媒花）

名前の由来＝諸説ある、上品なイメージを持つコウヤマキをホンマキと呼ぶのに対して、葉や姿形が劣るのでイヌマキと呼ぶようになった説。マキは「真木」は真っ直ぐな木のことで、材木としてスギ、ヒノキ、アスナロ、コウヤマキなどの総称であった。イヌマキは幹が螺旋状に成長するため割れが入り易く材木として劣るのでイヌマキと呼んだ説。材木としての利用価値は低い幹が捻じれたり枝が多く出る特徴を生かして生垣や庭園樹として使われる、雌雄異株葉は細長く扁平、10～12頃雌木は種の下に液果を付ける2段の実を付ける、種は毒があるが液果は甘く美味しい、昔は子供のおやつとして食べられていた。房総半島以西～沖縄に分布、海岸近くの山地に自生＊**花言葉＝高潔・長寿・不変の愛・慈愛、他**



スイフヨウ（酔芙蓉） アオイ科 フヨウ属 ＊花期＝8～10月

名前の由来＝朝咲いてその日のうちにしぼむ一日花、白い花を咲かせ時間の経過とともにピンク→赤と変化していく様子を「酔う」と見立てた。花色が変化するのはアントシアニンを合成する酵素が増えるので、故に陽の当たらない日陰の花は白色のまま終わる、スイフヨウはフヨウから作り出された園芸種ですので山野に自生していません。フヨウの一重咲の花に対してスイフヨウは八重咲たまに一重咲もある＊**花言葉＝幸せの再来・繊細な美・しとやかな恋**。スイフヨウの仲間、フヨウ・ムクゲ・ハイビスカス・アメリカフヨウ、等

